

師は河辺を残して全員辞任し、新たに島田佳矣が教授に就任した。

島田は絵画科（日本画）を明治二十七年二月に卒業し、東京高等工業学校図案科助教をつとめていた図案家である。さらに、フランス留学から帰国したばかりの岡田三郎助が教授として加わった。建築図案の教室は河辺と同期図案科卒業の千頭庸哉が助教として起用され、武田五一が留学のため辞職して大沢三之助が教授として再起用された。この人事には学校当局の図案教育刷新拡充の意図がよく現われているといえよう。ただし、小場恒吉の「図案科思ひ出」（99頁）などによれば、新しい西洋図案の導入による教育の大改革を期待していた生徒たちにとっては、この改革も姑息なものでしかなかったようだ。

明治三十年代の『東京美術学校校友会月報』には本校内外の懸賞図案募集の記事が頻繁に掲載されている。それらの高賞をさらったのは図案科生徒沢田誠一郎と十二町貞吉で、ともに明治三十八年に卒業。十二町は富山県工芸学校へ赴任し、大正八年死去。沢田は郷里の京都へ戻り、陶芸家沢田宗山となった。

⑦ 山田鬼斎死去

明治三十四年二月二十日、彫刻科教授山田鬼斎が病死した。享年三十八。二十二日、浅草吉野町光照院で葬儀が行われた。鬼斎は木彫部において木彫のほかに塑造による人体研究の指導にあたった（11頁高村光太郎の回想記参照）。夫人蝶子は岡倉覚三の妹であった。

⑧ 学生生活

美術學校生活

辻 永

中學校を出て美術學校に入ったのは、明治卅四年の春で、正式に洋畫の課程を修めたのである。それまで田舎（水戸）にゐた。中學校の圖畫の教師は丹羽林平氏（明治三十一年西洋画科卒）であった。白馬會の會員で小林萬吾氏、白瀧（幾之助）氏、湯淺（一郎）氏達の仲間だったのです。私は畫家に成る氣で、其の畫の先生の所にゐました。ほんとうの油繪を見たのは、其の先生のが初めてで、今でも記憶してゐるのは、其の丹羽さんが横濱の原善三郎氏の大きい肖像を描いてゐた。それを見て非常に感心した。（恰度卅二、三年の頃）自分もあんな畫をいつになつたら描けるか只感心してゐるばかりだった。そして、まあその先生の油繪具を借りて、中學校の庭から筑波山を、一、二度描いた。それが私が初めて油繪具を使ふ初めである。自分も珍しかつたし、その頃の學生に限らず、とにかく珍しいものだった。この丹羽といふ人は割合に不遇で、先年なくなつたが、風裁が良い人で、それは餘談だが、女の人にさわがれななどしてゐたのも、原因だったかもしれない。私が丹羽さんの家にゐる頃、そのお母さんが、學校を出ても決してエカキなんてなるのを、およしなさいと、しきりに言はれたことがあります。

學校の教材として古事記といふ題で、何か書けと言はれた事がありました。その時私は例の^{（だ）}コジキたと思つて、巖窟に乞食がある所を寫生して大笑ひされたことがあります。

今でこそ中學生が油繪を描いても珍しくないが、とにかく今から卅年近く前のことですから、水彩繪具を使ふことさへも容易でな

つた。其の頃中學生の中で繪がうまいなんて言はれてたんだが、今考へれば此頃の一年生位のものを描いていたんだらう。

恰度卅四年に美校に入つた時分、假入學といふのが出來て、木炭の寫生で假入學させられ「規則には無試験とある」一學期位、何科といはず同じ課程を得たものです。此の制度が何年續いたか、それにより本入學がゆるされて誰が何科といふことが極つたのである。

まだその時正木「直彦」さんが校長になる前で、久保田鼎といふ人が校長代理であつたりした。その前に岡倉「覚三」さんがやつてゐたのである。其の後まもなく正木さんが校長になつた。學校に入學したことから云つても殆んど、我々の前、又我々の時も撰科生といふものが實技が優秀で——尤も實技だけで入學してゐる人だが——我々本科といふのは教育家になるとか、さういふことで生活して行けるといふ、學校の方針もそんな風らしかつた。自然その實技なんか選科生に比べて劣つてゐたものだ。本科生でも立派に實技をもつて、又殊に選科生をなるべく取らないで本科生を専らにする様になつたのは、それから後のことで、恰度我々は其の境目頃なのである。で、まだ學校にも黒田「清輝」教室と淺井「忠」教室があつたあとが残つてゐる時分、我々が入つた時分の先輩としても、倉田重吉（白羊）君や庄野宗之助氏等がゐた。其頃私は岡吉枝氏倉田さん等に親しくしてもらつたものである。學校へ入つても、其頃白馬會研究所から來たかなり實技のうまい連中がゐた。上の級の人々との級が度々一所に競技なんかさせられたものである。——有名なチヤカホイは其の頃出來たもので、故人渡邊了助氏「正しくは亮輔。宮城県出身。明治三十六年西洋画撰科卒。同四十四年歿」が開祖で

うまく歌つたものである。——これは北の方の唄なので、その鼻にかゝつた美音が今でも耳に残つてゐるやうである。其の時分は選科生といふものは實技がうまければ飛んで進級することが出來た。其の人達に橋本邦助氏、和田三造氏、山下新太郎氏、兒島虎次郎氏等がある。人物としても實技の上からも一方に雄飛してゐた、故人青木繁君の常にそらうそぶいた顔が、かうした話の中にあり／＼と見え

て來る。
我々の級には選科としては森田恆友君なんか一緒だつたのである。山本鼎君や惜しいことに死んだ村上爲俊氏等一緒である。正宗「得三郎」君も一緒だつたが兵隊に行つたので一年遅れたのである。その人達はやつぱりうまかつたし、畫風も特長があつた。

そして學校關係の人は白馬會の展覽會などへ出品したりした。黒田先生を初め、藤島「武二」、長原「孝太郎」、岡田「三郎助」、和田「英作」等の諸先生が會員であり、又其他の會員の中にも幾人もの卒業生などが居て、其展覽會で我々在學生も一緒になることがあるので愉快でもあるし、學校の教室で教へられる事以外、啓發されることも多かつた。白馬會の展覽會は美術學校の出店の如く見られないでもなかつた。それは今の帝展（文展）などが出来る前のことです。

それから畫室生活なんてこともその頃まるでなかつたし、今でこそ親の金で在學中から畫室を立てゝもらつて勉強が出来るといふ様な時代になつてゐますが、我々……今でも一般はさうだらうが、下宿屋や素人らの室借といふ格だつた。

自分は最初牛込の親類の所にゐて、一里半ばかり毎日往復して通

つたものである。勿論其時分は交通機關も上野と新橋との間に鐵道馬車があつた位で、それも十三錢位であつたが大抵それも乗れないで歩いたものである。

明治三十五年頃、和田や橋本や熊谷〔守一〕などがゐた入谷の家へ私と柳〔敬助〕とがころげこんで五人で自炊することになつた。畫室が無いんだから、裸のモデルを家でかくなつては無かつたし、モデルなんかかなり貧弱のものだつた。だが其の家が畫室になつてモデルこそ使はないが靜物なんか描いてゐた。三疊二間に六疊で家賃が三圓八十錢であつた。隣の巡查の妻君のお産にお祝ひまでやつて、一人前經費が五圓位で、家賃と食費が出たのである。其の頃のおかず代は五人前で、五錢位で、豚など喰つても拾錢位だつた。

寫生地と云つても郊外は今の様に開けてないし、近頃の様に文化住宅の赤瓦なんて絶対になかつた。建築を描いても郊外なら藁屋根であつて、今の様に日本の風景かどうか解らないといふことはなく純日本式の風景だつた。僕が四五年も見ない中に田も、甫も、山林も、溝の様な處でさへ住宅地となつて了ふ今日此頃の東京の郊外、況して二十七八年も前の寫生地だつた早稲田や日暮里は跡形もなく變つてしまつて、都の一部を形作つて居る事は尤もの事である。

今でも記憶してゐることは在學中一度、美術祭があつたことである。それは明治三十六年十一月三日のことで、催として各科の祭神として、日本畫では狩野芳崖、西洋畫でラファエル、彫刻で野見宿禰、圖案で尾形光琳、と云ふ人達を祭神として正木校長が衣冠束帯でお祭りをした。そしてこれら祭神の作品を展観した。我々生徒、

教師も混つて、要するに行列や、芝居をして一日を歡樂の裡に暮し、又多くの人を招待したりした。餘り大袈裟だつたので、文部省あたりから差留められたのか二度と催されなかつた。我々西洋畫の有志で鉛管踊をやつた。それは私が考へたのだつた。(二年生の頃だつた) 又洋畫科の大勢で天象行列をやつた。今帝劇に居る薄〔拙太郎〕君が裸體で身體を赤黒く塗つて雷神になり、和田三造君が風神、それらに隨つて七彩の虹の行列といふ譯で、下段にはその雷神風神の左右に自分やら森田龜之助君や服部愿夫君など、上段橋の上には幾十人が虹の形に廣がつて、そこでにわか覺えの虹の歌を合唱したものである。

彫刻家^{〔科〕}の出し物、活人彫刻バルトロメオ作の『死』其他各科本科の有志によつて『巴里の畫學生』の假裝行列等の呼物で、それ等催物の一部が市中にまでネリ出したのが問題になつたらしい。此行列の中には、岩村〔透〕、岡田、合田〔清〕、和田の諸先生も這入つて活動された。私の勉強時代は先輩と後輩とが一緒に面白く、有益に勉強出来たものである。我々以後は學校の服裝も正服^{〔制〕}でなければならぬし、總て本科生が學校の主のものとなつて來た境目の頃なのである。

其の頃既に相當名をなしてゐた、石井柏亭君やら、日本畫の卒業生だつた平福百穂君などの顔も西洋畫の教室に見えたものである。當時小さな展覽會などは展覽會場などには無いので、お寺などで油繪をならべたものであつた。倉田君とか岡君とか、死んだ鹽見〔鏡〕君、同じく死んだ原田〔竹二郎〕君、それらの先輩に混つて、若い

ところでは二科の齋藤豊作氏、極若輩では柳敬助君とボクなどで、SO會といふ會であつて、お寺などで陳列したものである。要するにならべて、お互に研究するといふことが主であつたのである。

〔『画学生の頃』昭和五年。アトリエ社〕

美校時代のことなど

長谷川昇

札幌の中學を出て上京した頃は、高等學校の三部、つまり醫科の方を志望して勉強してゐた。醫科を選んだといふことには大した意味も無いが、周囲の友だちが皆醫科志望だつたかもしれない。然し醫學の事は好きなことは好きだつた。今でも好きである。繪は中學時代にも水彩畫など描いてゐて、上京後、試験準備をしてゐる時も描いた。畫家にならうと決心が着いたのは、その高等學校試験を二度落第してしまつた頃だ。

繪かきになるといふ事は私の家は勿論、親戚でも大反對で、二度目の落第をした年の夏小樽へ歸つて説き伏せやうとしたけれども駄目だつた。で、結局自分から美術學校へ這入つてしまつたので、こつちのものになつてしまつたのである。私の這入つた年〔明治三十八年。予備科設置の年〕はその年に限つて志望者を全部入れて、一學期間は誰もかも洋畫と日本畫と彫刻を勉強させられた。そして一學期の終りに全課目の試験をして入學の採否をするといふ妙な制度であつた。

私の美校時代には今のやうに外國の繪に接する機會もなければ、又紹介されてゐるものもなかつた。わづかにコランとかローランスとかを唯一の偉い畫家と心得てゐた。黒田〔清輝〕先生もコラン等

の手法を主として教へ、例へばパレットにブラックが出てゐると叱られた程である。

我々の同級は田邊至君、九里四郎君、加藤靜兒君、近藤浩一路君、田中長君、藤田嗣治君、岡本一平君、或は現に中外商業を編輯してゐる大谷〔浩〕君などで、何れも劣らずボヘミアンを發揮してゐた。例のチャカホイ節を大いに流行らせたり、銀座を踊り練つたり、そして餘り學校へ出ずに家で描いたり酒を飲んだりすることの方が多い位だつた。美校にあゝいふ空氣を作つた人は、今思ふとあの美術史を受持つてゐた岩村〔透〕先生であるやうに思ふ。先生は巴里の畫家の奔放な生活を説いて、學生を大いに興奮感激せしめたやうなわけである。

岡本君はどうして今は油繪をやめてしまつたのか惜しいと思ふ、獨得ないい繪を描いてゐたんだが。一度ランニングの選手として岡本君を我々のクラスから出して盛んに應援したが、彼は遅くて皆よらずつと離れて殿りをつとめたが、とにかく終りまで獨りで走つてゐた、却々眞面目な人でね、今でも眞面目な人である。

始めて展覽會へ繪を出したのは明治四十年に上野で行はれた博覽會へ出したもので、今思ふと實に冷汗を覺えるやうなものだ。手古舞を描いた五十號大のもので、これを今も皆が覺えてゐて「君が手古舞を描いたつげなあ」と言はれるのには實に弱つてまふ。

(同)